

「戦争体験」に思う

白沢英子

現在、私は84歳。横浜で生まれ育った。

その頃は、世界恐慌が日本列島に波及、世界経済混乱の真只中であつた。1939年には、ヨーロッパ全土を巻き込んだ第二次世界大戦の混沌の中で、日本は国の侵略、南方資源の確保を狙い、日独伊三国同盟のもと、忘れもしない1941年12月8日に米英に宣戦布告、太平洋戦争の勃発となつたのだ。

その時、私は小学校5年生。日本海軍は、ハワイ真珠湾を突如攻撃、太平洋戦争の場は東南アジアの島々を駆けめぐつたのである。

日本軍は開戦と共に快進撃で、南の島々を占領、太平洋全域に勢力を広げた。

まだ小学生だつた私は、地図を広げては驚くほどの大国を相手に戦いを挑む自国を思い、心の隅では一抹の懸念はあつたように思つた。

しかし、若い日本の特攻兵士たちが、人間魚雷となつて敵に体当たりする様子は、無念の思いではあつたが、一方ではその勇敢さに憧憬の思いさえ抱いたものである。しかも、新聞、ラジオでの戦果

の報道の度に小躍り^{こおど}するほど戦いに夢中であつた。

国内では、連日出兵兵士の見送り、男子に代わる女性たちの苛酷^{かこく}な労働は大変なものであつた。学生は学徒動員され、勉強どころではなかつた。国民の暮らしは「勝つまでは我慢^{がまん}しましょう」をスローガンに、じっと耐^たえるばかりであつた。

「衣」は、モンペと言って着物を改良し、裾^{すそ}にゴムを入れたももひきの^ひようにして穿いて体を動きやすくしたり、頭を防ぐための防空頭巾^{ずきん}を腰^{こし}に下げたりして、身を守るようにした。

「食」についてももっぱら芋類^{いも}・大豆・少々の米も配給制でお腹をすかし、じっと我慢^{がまん}した。

「住」については、そちこちに防空壕^{ぼうくうごう}が掘^ほられたり、夜になると敵機^{しゅうらい}の襲来^{とうかかんせい}を防ぐための灯火管制^{とうかかんせい}といって電灯を黒い布^{おほ}で覆い、一点の灯も外に洩^もれないようにした。

1945年アメリカの猛反撃^{もうはんげき}に悪化を続けた日本は、折角^{せんりょう}占領した島々も撤退^{てつたい}・陥落^{かんらく}・玉砕^{ぎよくさい}し、ついに本土東京の大爆撃^{ばくげき}を受け多くの犠牲者^{ぎせい}を出した。

いつも横浜上空を通りこしていた敵機は、ついに私たちの住む横浜^{よこはま}をめがけてきたのである。

その時私は、学徒動員されお弁当箱ひとつを持って出勤していた。
朝からの空襲警報はなかったのに、その日は始業後いくらもたたな
いうちにサイレンがうなりを上げたのだ。「学生さんはお帰りなさい。
早く、早く」

ところが私たちは勤務中の空襲警報も慣れっこになり早帰りが
つまらないと、その日に限って家に帰らず、山手にかけて登り学校の
先生に逢いに行ってしまったのだ。

先生が大喜びで迎えてくれたその時、海の方から港にむかってB
29の編隊が横一線の黒帯となって迫ってきたのである。先生が叫
んだ。「だめだ。早く校庭の防空壕へ！」

さっき見えたB29が不気味な速攻で頭上を埋めつくし、低空飛
行で空が暗くなった。また先生の声「小さくかがむんだ！丸くなる
んだ！」

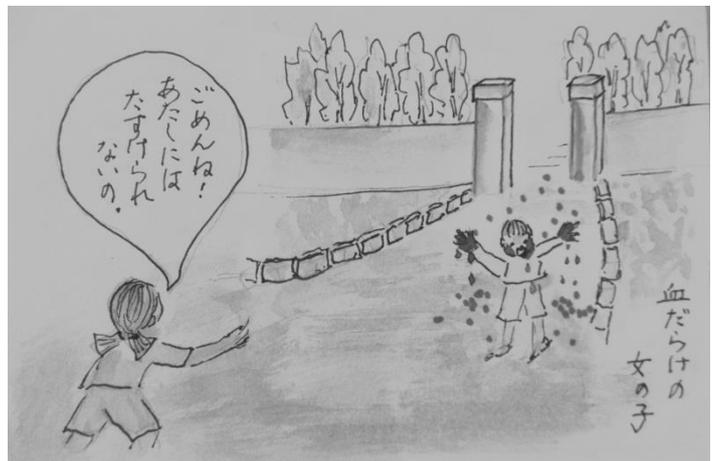
爆音の凄さで耳を塞いだ私は壕の中で、きょうは死ぬ！と思った。
近くに落ちたであろう爆弾の炸裂音で先生にかじりついた。

静寂が戻り、こわごわとび出した壕の上に不発の焼夷弾がころが
っていた。「B29は去った。早く帰りなさい。家の人に会えなかつ
たら、必ずここへいらっしやい」

それきり先生とお会いすることはなかった。眼下に見えた横浜^{よこはま}の街は、すでに火に包まれ、炎^{ほのお}の渦^{うず}となって燃えひろがっていた。

先生や、裏門から帰る友だちとも別れ、山手通りに立っている表門までのだらだら坂に向かって私は走り出した。その時、救いを求めてきた血まみれの女の子が門の中へ入ってきた。頬^{ほお}の肉が垂れ、血に染まった両手を広げ、よたよたと私に近づいてくるのではないか。

おどろ^{おどろ}きとこわ^{こわ}きと悲しきで
私は介抱^{かいほう}どころかまわれ右
をして、裏門から逃^にげてしま
ったのだ。「ごめんね！」
と叫^{さけ}んだのを覚えている。



帰り道、既に筵^{すで}を被^{むしろ}った死^{かぶ}体が累々と横たわり、私を追いかけているような感であった。筵^{むしろ}から消炭^このような黒焦^こげの足^{のぞ}が覗^ぞいていた。

家は焼け落ち何もなかった。大きな布団を背負い逃^にげ惑^{まど}っていた母^あに逢^{うれ}え嬉^{うれ}しかった。一時避難^{ひなん}の焼け残った学校の床^{ゆか}に蹲^{うずくま}りホッ

としたのも束の間、^{くらやみ}暗闇の^{ろうか}廊下の向こうから目と鼻と口だけ出した全身包帯だらけの人が歩いてきた^{おそ}恐ろしさも忘れられない。



その後、日本各地の^{ばくげき}爆撃、^{おきなわせん}沖縄戦、^{ながさき}広島・^{げんぱく}長崎の原爆投下により、ついに日本はポツダム宣言の^{じゅだく}受諾、^{こうふく}無条件降伏をしたのである。

この太平洋戦争の終結から70年を経た。今、私は生きているが戦争という^{おろ}愚かな^{こうい}行為によって、たくさんの^{みたま}御霊となった人びとの思いに心を^は馳せなくてはと思った。一度しかない人生を大切にするためにも^{さけ}反戦を叫びたい。

